

●紫も白花もあるホタルブクロ烏瓜にも黄の実もあらむ

梅津純子

「も」が四カ所でつかわれたが、一首に意味は通っていて、面白い云い方でもある。「も」の意味は、並列や付加。格助詞の「に」に並列や列挙、強調の意味を加えることがある。「烏瓜にも」で、加えた意味は当然だろうか。ホタルブクロにはピンクもある。烏瓜で黄の実が歌（詠）われていないこと、などに触れたあとでの歌である。

白き糸の花（一首目）、真白きレースの花（二首目）もこの烏瓜のもの、庭の花。

歌に手順があつて、〔亡き父のもの〕牧野（の索引）も引かれる。それが朝ドラの後（六首目）。じつのところ作者の調査で、これが〔花も葉も此は似て非なる〕黄烏瓜（きからすうり）であることがしれる。またその塊根（のデンプン）があつた汗知らず「天花粉」の原料になることもしる（後ろの二つの歌）。これらプロセスが一連になった。読み手にもついてゆく面白さがある。疑問と解明のそのあとに、これ、

雌雄異株なればレースの白き花黄熟の実を結ぶことありや

●除草後の丘に一羽のオスの雉往きつ戻りつ一声もなく

大橋千佳子

歌が対にもなっているように、おおよそ歌を受けた歌がある。そうやってみえてゆく世界がある。オスの雉、地味なメスの雉はむしろいられていない。この歌には、この歌、

雉一羽大樹の下の叢に在りし我が巢をただ捜しおり

除草作業の歌は、それらの歌の直前にある。

炎天下緑の波を倒しゆくシルバーさんの斜め横隊

一連タイトルは「炎天」。シルバーさん、はシルバー人材センターの人。緑の波を倒しゆく、は比喩的な云い方だが、「丘」に対してのものか、ゆたかなものがある。七、八首目は庭でのじしんの作業（中のもの）。コニシキソウ、モスキート音の表記も目をひく。九、十首目は絵画展のもの。槐多の自画像、屏風絵の業平に独自の把握がある。ガランス硬し、また、日本男子五等身なる。ガランスは槐多が好んでつけた色だという、深い茜色。

●ステンレスの銕もよいと使ひしが鋼の裁ち銕をいかにせむ

布宮慈子

鋼の裁ち銕、は手もとにあるものか。裁ち銕はわが家にもあるが、裁縫はしないので、使う機会がない。いかにせむ、は研ぎの問題があるということ。一連タイトルも「研ぎ」。二首目から、研ぎ屋をさがしたようだ。われのラシャ切り銕（三首目）、が有名な庄三郎でないことの断りがあり、

これは面白い。ネット検索では、裁ち鋏で庄三郎がすぐに出てくる。裁ち鋏、は布を裁断する洋裁の道具。

四十七年前に求めし鋏にて研ぎに出さむと荷物をつくる

荷物をつくる、に手作業のイメージがある。ユーチューブの紹介で決まった研ぎ屋（群馬県桐生市）、このことのやりとり、評価が後段の歌になっている。

あらためて整理された云い方、洋裁熱、この十首目はいい。

あらためて道具はたいせつ稲穂垂る季節に洋裁熱は上がり来

前号作品短評B 〈慈子〉

●椅子三つ夕のすずみをしているか路地の奥にも兄弟がいて

小野澤繁雄

「夕涼み」と題する一連。昭和の一場面を見るようである。東京の下町、寅さんの帰ってくる場所のような路地。しかし、そのような郷愁を覚える設定ではないのかもしれない。現代における夕涼みは、どんな場面なのだろうか。読む側の想像によってずいぶん変わってくるはずだ。

出てみると乗り合うことのあることに人のカラダがこんなに近い

電車やバスなど、乗り物を指しているのだろう。混んでいなくても次の客のために一人分と思う座席を確保し、座る。また立っているとしても、ゆとりをもって立つことは稀だ。たまに外出してみると、他人の体が近くにあることに驚くのだ。家族よりも密着した状態で運ばれていく乗り物。具体的に何もいっていないが、「乗り合う」という表現から公共交通機関を指すことはほぼ間違いない。「こんなに近い」という驚きが、逆に作者の日常を映し出しているといってもよい。

●秋立つに猛暑収まる気配なく熱中症への備へはつづく

河村郁子

立秋を意味する「秋立つ」と暦の上ではなつたけれども、まだ熱中症に注意しなければならぬ、

この夏は。まったくもって猛暑・酷暑の夏であった。ちなみに、立秋とは毎年八月七日ごろ〜八月二十二日ごろにあたるが、日付が固定されているわけではないという。

灼熱の敷石のすき間に緑這ひ雑草くさの力が励ましくるる

焼けつくように熱い敷石の間に緑が見える。雑草のなんと強いことか、その強さが自分を励ましてくれているように思える。なるほど、草は夏のあいだも太陽の熱を思い切り吸収しているように伸びる。暑さに参っている場合ではない、と草に教えられた作者である。

犬の散歩に朝はつゆ草夕方は月見草愛でし 見当たらぬなり

かつて犬の散歩をしていたころは、早朝には露草をまた夕刻は月見草を美しいと思っただけで、ことは見かけない。どうしたのだろう。今まで当たり前と思っていた季節感が、すでになくなっていないかとの不安をうたっている。

●聖五月クマの依代よりしろ伐られおり

新野祐子

「聖五月」は、キリスト教のマリアの月であることから五月の美称。もとはカトリックの「聖母月」に発して「マリア月」ともいうそうだが、ここでは深い意味はない。「依代」は、神霊が現れるときに宿ると考えられているもので、樹木・岩石・御幣ごへい・動物などが祀られる。原始宗教（アニミズム）では、この世に在るものすべてに魂が宿り、それが神となり精霊となり人々の暮らしと密

接な関係を持つと考えているようだ。クマの崇高な感じと山で失われてゆくものへの残念な気持ちが一旬を支えている。

夏負けの毛並を晒すテン・キツネ

山百合の盗られししじま広がりぬ

わかりやすい句。夏のひどい暑さは、山にいる動物たちへも大きく影響し、見すばらしい姿になつていたという。逃げ場のない気候の変動は、等しく生き物に降りかかり、同じ時を過ごしているのだと気づく瞬間である。テンやキツネが人間のように「夏負け」したというのが面白い。百合が盗まれてしまって、元あった場所が静まりかえっている。それを見る作者の心にも空洞が生まれただ。